

妊産褥婦および乳幼児のメンタルヘルスシステム作りに関する研究

金澤 浩二 琉球大学医学部産科婦人科学教室

協力研究者

(琉球大学医学部産科婦人科学教室) 佐久本 薫, 木村 幸枝, 大城 順子, 比嘉 国江, 古波蔵 真琴, 中村 幸乃

研究要旨

産後うつ病の罹患率とその危険因子の解明を目的とした多施設共同研究に参加し、助産婦に精神疾患診断技術を教育し賦与することにより、その助産婦が母子医療の現場におけるリエゾン精神医療の導入に際しマンパワーとなりうるか否かの検討を開始した。面接員としての助産婦の教育訓練を開始し、今後起こりうるいくつかの問題点とその対応について考察した。

A. 研究目的

本邦における初産婦の産後うつ病の罹患率およびその危険因子を明らかにすることを目的とした多施設共同研究に参加し、その研究過程において、助産婦に構造化面接法による精神疾患診断技術を教育し訓練し、妊産褥婦の科学的な精神的評価法を体験させ、精神的ケアへの関心を高めてその重要性を認識させることにより、その助産婦が母子医療の現場におけるリエゾン精神医療の導入に際しマンパワーとなりうるか否かを検討する。

B. 研究方法

助産婦に対し構造化面接法による精神疾患診断技術を教育し実地的訓練を行う。本研究では、初産婦を対象とし、妊娠8ヵ月、産褥1ヵ月、3ヵ月および1年の4回にわたりアンケートと直接面接を行う。アンケート回答と面接結果から、DSM-IV(American Psychiatric Association, 1994)に分類された診断基準に準拠して診断を行い、産後うつ病の頻度およびその危険因子としての症状項目を検討する。

C. 研究結果

1. 面接員の教育訓練

助産婦5名(経験年数1年:1名、2年:1名、5年以上:3名)面接員として選び、教育訓練を開始した。

2. 教育訓練上の問題点

実際に教育訓練が開始し、その取りくみにおいて、以下の問題点が生じた。

- ・日常の勤務としての助産婦業務を障害しないように時間を捻出することの困難さ - 周囲の理解と協力を得つつ一層の努力が必要
- ・頻回に指導を受けることの困難さ(沖縄県の地理的問題点) - ビデオテープなどを積極的に利用
- ・妊産褥婦に対する精神的ケアの経験不足 - 前向きな努力が必要

3. アンケートと直接面接に際し予想される問題点

教育訓練を受け、研究内容への理解が深まるにつれて、今後開始される実際の面接に際し以下の問題点への危惧が指摘され、対応が必要となった。

- ・面接時間をいかに確保するか

- ・面接員の勤務移動の問題
- ・プライバシーの保護を考慮した面接場所の確保
- ・入院安静が必要なハイリスク妊婦の面接はどのようにするか
- ・脱落例をなくするための工夫 - 乳児検診、育児指導、乳房管理指導などと面接とを組み合わせる努力
- ・住所移動への対応

D. 考察

本共同研究は、本邦における産後うつ病の発生状況を正確に把握すること、ならびに、そのハイリスク妊婦を特定する方法を開発すること、を目的とした斬新な研究である。産科診療の場で重要な役割を果たす助産婦を本研究に参加させ、実際にアンケートと構造化面接をとうして精神疾患の早期発見と診断にあたらせることは、この方面への関心を一層高めるためにきわめて有意義であると考えられる。

現在、当施設では、面接員としての助産婦の教育訓練の段階にあるが、精神疾患の分類と診断、特殊な面接法などこれまでに経験していなかったことが多く、理解するためかなりの時間を要した。しかし、助産婦のレベルは徐々に目標へと達しつつあり、近く実際にアンケートと直接面接を開始できる予定である。

助産婦は、日常の産科診療において、外来での妊婦健診、母親学級、入院後の分娩と産褥管理をとうして妊産褥婦と接する機会が多く、互いに気軽に話し合える関係にある。くわえて、妊産褥婦の生理と病理をよく理解しており、多くの知識をもっている。したがって、妊産褥婦

の精神的解析へのアプローチの場では重要な役割を果たしうるものと期待される。

助産婦の教育訓練、および、今後開始される実際の面接に際しいくつかの問題点が浮上ないし想定された。ほとんどは個人個人の負担になるが、周囲の理解と協力を得られるような環境づくりに努力しなければならないと考える。

妊産褥の精神的異常や疾患が発見された場合、その対応も必要であり、精神神経科との連携を検討中である。

当施設ではいわゆるハイリスク妊婦が大多数であり、いきおい母体と児の身体的管理にほとんどの努力が払われ、精神面、こころのケアが疎かになりがちであった。今後は、医師、助産婦を含むコメディカルスタッフが精神的異常や疾患の診断能力を得ることによって、妊産褥婦のトータルケアが行えるようになることを期待したい。

E. 結論

産後うつ病の罹患率とその危険因子の解明を目的とした多施設共同研究に参加し、助産婦に精神疾患診断技術を教育し賦与することにより、その助産婦が母子医療の現場におけるリエゾン精神医療の導入に際しマンパワーとなりうるか否かの検討を開始した。面接員としての助産婦の教育訓練を開始し、今後起こりうるいくつかの問題点とその対応について考察した。

F. 研究発表(論文発表)

- 1) 佐久本 薫・正本 仁・金澤 浩二：母子異室管理 - とくに母親のこころの問題. 周産期医学 29: 41-45,1999